北海道新聞（令和８年３月18日）

発信 地域から

函館

函館盲学校・聾学校 130周年

学びの楽しさ 次世代へ

(上)

「130年の誕生日おめでとう」―。北海道内で初めて設立された特別支援学校、函館盲学校と函館聾学校が昨年10月、それぞれ設立130周年を迎えた。同月25日に開かれた記念発表会で、児童生徒らは歌や踊りを披露。「学校が大切にしてきたことを継承したい」などと力を込めた。

草分け的存在

両校にはそれぞれ幼稚部、小学部、中学部があり、戦後だけでも1100人以上が卒業。現在は盲学校に10人、聾学校に13人が在籍する。うち半数以上が知的障害や肢体不自由などの重複学級に所属している。

昨年11月の東京デフリンピックにボウリング競技の日本代表として出場した桜庭まどかさん(37)も聾学校の卒業生だ。1月には母校を訪問し、在校生に「夢に向かって進めば宝物がみつかる」と語りかけた。

130周年記念の発表会で、学校の創立を祝う函館盲学校の児童生徒ら（金田淳撮影）

両校は道内の特別支援教育の草分けで、現在別々の学校だが、1895年（明治28年）に創設された「函館訓盲会」にルーツがある。目の不自由な人たちが満足な教育を受けられないことを目の当たりにした函館駐在の米国人宣教師の母C・P・ドレーパー氏が、私財を投じて設立したとされる。

その7年後、訓盲会を耳の聞こえない子供とその母親が訪ね、教師の篠崎清次氏に「子供に教育を受けさせたい」と懇願した。篠崎氏は強度の近視で仕事に就けない絶望を味わった経験から、自らが聾教育を行うという条件で関係者を説得して啞生部を設置。現在の函館聾学校となる。

篠崎氏は夜に指圧で得た報酬を教員たちの給料に充てた。元函館聾学校長で両校の歴史に詳しい島津彰さん(75)＝函館盲聾教育後援会長＝は「歴代の教員たちの『障害がある人の教育を絶やしてはいけない』という強い思いが学校を支えてきた」と話す。その思いは今も受け継がれている。

卒業生が教師

「先生と一緒に歌いましょう」。盲学校の音楽教室で中学部の音楽科教諭・池田サラジェーンさん(35)が明るく声をかけた。生まれつき全盲で同校の卒業生。音声読み上げ機能付きの端末を使いながら授業を進める。

池田さんは大学卒業後、市内の高校の音楽教諭として勤務していたが、「自分と同じように障害がある子供に教えたい」と考え、特別支援学校で教師になることを希望した。池田さんの生徒時代に体育科の教師で、今は同僚の札内亮司教諭(52)は語る。「教え子が教師として次の世代に学ぶことの楽しさを伝えている。私たち自身も、大きな歴史につらなる流れの一部だと感じる」

（函館報道部　白石翠）

＝3回連載します